

仙川教会 復活節第3主日礼拝 「ラボニ！」

ヨハネによる福音書20章11～18節

★今日の聖書は、よみがえりの主がマグダラのマリアに現れられた場面で、とても印象的な情景である。安息日明けの朝早く、マリアはひとり主が葬られた墓に向かう。ところが墓からは石が取り除けられているのを見て、急いでペトロたちの所に行き、「主が墓から取り去られました」と知らせる。彼らは墓に駆け付け、墓が空であることを確かめただけで、ペトロたちは帰ってしまう。マリアはただ一人墓にとどまっている。

★「マリアは墓の外に立って泣いていた」。マリアが「泣いている」ことが印象的に繰り返される。二人の天使が「なぜ泣いているのか」、そしてよみがえりの主も「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を探しているのか」と。

マリアはなぜ泣くのか。「『私の主』が取り去られた」から。彼女は気丈にも、主の十字架の死をもはや動かしがたい事実として受け入れた。ただこれからは、主のご遺体を収めた墓にとどまり、自分一人で主のお墓を守って生きてゆく、と心に決めたのだ。お墓の前で、生前の主の面影を偲び、主の言葉を胸にして、それをよすがとして生きて行こうと。やっと今朝、お墓の前に来たのに、墓は空っぽ、主のご遺体がない。マリアはまったく取り乱し、今やかつての「7つの悪霊に取り憑かれた」状態に戻らんとしているのである。よみがえりの主が真っ先にマグダラのマリアに会わなければならなかった事情がそこにある。

★その彼女に主が「マリア」と呼ばれると、彼女は振り返って「ラボニ！わが主よ」と答えた。マリア！ ラボニ！ この呼び交わし！読む者の心を揺さぶらずにはおかない。

ただ、マリアははじめに主に声をかけられた時、彼女は振り返って主を見たが、「イエスとは気づかなかった」。なぜか！これが人間の死の厳しい現実である。死んだ者が生き返るはずがない。マリアが探しているのは「主の遺体」、よみがえりの主とは思ってもみない。

その彼女をしてよみがえりの主と認めさせた、それが「マリア」という主の呼びかけである。婦人よ、ではなく「マリア」と、あの懐かしい主の呼びかけに、彼女の目からうろこが落ち、心の目は開かれた！マリアにとって「名」が主との新しい絆を結ぶ符丁であった。

★よみがえりの主が弟子たちに現れた記事は、他に4例あるが、いずれも最初はみな、主と気づかない。気づくのは、その弟子と生前の主との「絆」によみがえりの主が触れられたときである。トマスの場合は「主の手足の釘痕」(20:27)、ペトロの場合は「早朝の網打ち」(21:7)、エマオ途上の弟子たちは「食卓のパン割き」(ルカ 24:31)、パウロの場合は「迫害」(使徒 9:4)。それぞれが「主との絆」「符丁」であった。

★私たちの場合はどうか。私たちは生前の主との出会いはないが、「見ずして信じる者は幸いである」(20:29)が私たちへの語りかけであろう。私たちの受洗は、わが人生の途上の決定的な時に、主が「わが名」を呼んで下さった時ではなかったか。その時、私たちも「ラボニ！我が主よ！」と主の呼びかけにお応えしたではないか。私たちは洗礼を通して古い私が死に、新しい私に変えられたことを、今、新たに思い返す。教会に出かけ、礼拝において、聖餐式において、説教において生ける主と出会う幸いを与えられている。日々の生活においては、祈りをもって聖書を開くとき、よみがえりの主が私たちに親しく語りかけて下さる。日々に主にわが名を呼ばれ、「ラボニ！」と主を呼び求める者は幸いである。祈ります。